

1 ごあいさつ

長崎スペイン世界友の会の会報誌『ボレティン』は、おかげさまで発行から11年目を迎えました。この期間に会員の皆様から、スペイン語圏の文化や歴史、社会の記事、そして旅の思い出など、たくさんの原稿をお寄せいただきました。本当にありがとうございます。これからも気軽にご寄稿いただければうれしいです。どうぞよろしく願いいたします。

Contenido

1. あいさつ
2. ¡Hola todos! マドリードからの便り
3. 2024年の活動報告
4. 『ゲルニカ』特殊な三連祭壇画
5. カミーノと私
6. Valencia y Barcelona 訪問記

2. ¡Hola todos! マドリードからの便り

オラ！こんにちは、皆さん。

2025年9月、久しぶりにバルセロナを訪れました。高齢の両親との3人旅です。サグラダ・ファミリアの進み具合や初めての観光地を楽しみにしていましたが、しっかり案内しなきゃと気負いすぎました。しかめっ面で準備をしている自分に気づき、「せっかくだから私も楽しもう」と気持ちを切り替えたら、一気に心が軽くなりました。

ところで、皆さんは「carteristas (カルテリスタス)」という言葉をご存じですか？観光客を狙うスリのことです。語源は「cartera (財布)」、「-ista (～をする人)」で、「財布の人」。バルセロナでは1日に300件ほどのスリが報告されており、地下鉄や観光地、飲食店などで多いそうです。私もカフェで店員さんから「さっきスリがあったから、バッグは見えるところに」と言われ、背筋がピン！と伸びました。とはいえ、YouTubeで特徴や手口を予習していたおかげで旅行を楽しめました。スリ常習グループを見張って、「¡Carteristas! (スリだ!)」と大声で叫んだり、笛を鳴らして周囲に注意を促す市民グループもいるそうです。



サグラダ・ファミリアは、完成間近。現在、正面右の塔を建設中で、主要部分は2026年、装飾は2030年代まで続くそうです。まだしばらく成長中の姿を見れそうです。(写真参照)

観光しつつシエスタを満喫して、スペイン人よりもスペイン人だったかな。

(笑) 両親から「こんなに歩くとは思わなかった」と苦笑いされましたが、無事に帰ってこられて何より。帰ってきて思うのは、やはりバルセロナは、訪れる価値のある魅力的な都市です。

(マドリード在住 浜松)

3 2024年度（2024.10～2025.9）活動報告

(1) 月例会（各月第4土曜日 14:00～16:00 実施）

年月日			講師(敬称略)	内容	参加者数(人)
2024	10	12		総会	10
2024	11	23	橋本和正	海洋生物学会とスペイン旅行	15
2024	12	14		クリスマス会	12
2025	1	25	Cindy Takahashi	Cultura y corazon de Paraguay	15
2025	2	22	Catalina Harumi Oda	ブラジル	16
2025	3	22	徳山光	須磨コレクション、第一次寄贈資料	11
2025	5	24	Francisco Torregrosa	スペインやスペイン語について	9
2025	6	28	さとうしげきレオ	マリンガ市とブラジルについて	11
2025	7	26	David	ウユニ:天と地が出会う場所	9
2025	9	27	永井智香子	コロンビアの山と音楽	11

(2) スペイン語教室

初級、中級、上級の3クラス開講

講師：Francisco Torregrosa

開催日時：毎月第二土曜日 初級 13:00～14:15

中級 14:30～15:45

上級 16:00～17:15

会費：スペイン世界友の会会員 500円 会員以外 1,000円

スペイン語教室 実施実績

年月日			参加者数(人)			
			初級	中級	上級	計
2024	10	9	3	6	9	18
2024	11	16	2	4	3	9
2024	12	28	3	5	7	15
2025	1	18	3	5	7	15
2025	2	15	4	8	9	21
2025	3	8	2	8	8	18
2025	4	12	3	6	8	17
2025	5	10	2	4	6	12
2025	6	14	4	3	5	12
2025	7	12	1	2	7	10
2025	9	6	2	2	4	8
クラス毎合計人数(のべ)			29	53	73	
受講者総数(のべ)			155			

(3) R6年ながさき国際協力・交流フェスタに参加

日時：R6年9月15日

場所：長崎県庁



4 『ゲルニカ』 特殊な三連祭壇画。 プロパガンダ、欲望、痛み、涙、そして一筋の希望。

Francisco Torregrosa

「ゲルニカ」は象徴に満ちた絵画であり、観る者の数だけ解釈が存在すると言っても過言ではありません。それこそがこの作品の最大の魅力のひとつです。とはいえ、私がこの傑作を不朽の名作たらしめていると考えるのは、中央のピラミッド構造で描かれているテーマ、すなわち「闘争」「対立」「争い」という、時代や場所を問わず、地球上のすべての生命の行動原理となってきた、そしてこれからもそうであるであろう普遍的な主題です。

このテーマを表現するために、ピカソは闘牛の象徴性—特に「スエルテ・デ・バラス（槍の試練）」という場面を用いています。そこでは、牛と馬が敵対する存在として描かれ、和解し得ない敵同士として対峙しています。

プロパガンダと欲望。「ゲルニカ」は、スペイン内戦（1936~1939年）の文脈の中で制作された委託作品です。当初は壁画として構想されましたが、最終的には絵画として完成し、1937年のパリ万国博覧会におけるスペイン館の主展示作品として、スペイン共和国政府によって依頼されたものでした。

したがって、論理的に考えれば、この作品のプロパガンダ的な語りは、二つの主要な軸に沿って展開されるべきです。第一に、共和国軍が反乱軍（フランコ将軍率いる）に対して勝利するというメッセージを、力強く、疑いの余地なく伝えること。第二に、反乱軍による残虐行為、今日で言えば戦争犯罪—を告発することです。

1937年前半スペイン内戦の勝敗はまだ不確定でした。ピカソは、同年1月に制作した『フランコの夢と嘘』の第1図と第14図を特に想起しながら、中央のピラミッド構造において、共和国軍（雄牛で象徴）による反乱軍（馬または雌馬で象徴）への勝利を描いています。

この解釈から導き出されるのは、ピラミッドの基底部に横たわる死者が、反乱軍の総司令官フランコであるということです。彼は馬=軍隊から振り落とされ、共和国軍=雄牛の激しい突進によって命を落としたのです。これは画家の願望を表したものであり、ピカソは一石二鳥を狙っています。すなわち、共和国の勝利を予告すると同時に、フランコへの復讐という自身の願望を絵画の中で実現しているのです。

というのも、ピカソがプラド美術館の館長を務めていた時期に、フランコ率いる空軍がスペイン国立美術館を焼夷弾で爆撃したという背景があるからです。

プロパガンダ的な要素は、ピラミッドの両側にも見られます。作品のタイトル「ゲルニカ」は、1937年4月26日にドイツおよびイタリアの空軍（反乱軍の同盟国）によって行われた、ゲルニカ市への無差別爆撃を直接的に想起させます。ここに描かれている敵は、非人道的で怪物のような存在であり、子どもや女性の命すらも尊重しません。この異常な獣にとっては、目的のためには手段を選ばないのです。

とはいえ、民間人に対する無差別爆撃は、両陣営によって行われたことを忘れてはなりません。ピカソが作品に風景的な要素-建物、構造物、物体、明確な指示など——を一切描かず、ゲルニカという町との直接的なつながりを示していないのは、もしかするとこの事実を意識していたからではないのでしょうか。もしピカソがこの点を念頭に置いて作品を制作していたとすれば、『ゲルニカ』はさらに一つの象徴となります。

——そして、ピカソが法的文書に自筆で「GUERNICA」とすべて大文字で記しているのも、この象徴性を強調するためなのかもしれません。そうであるならば、『ゲルニカ』という絵画は、過去に、現在に、そして未来において、いかなる軍隊によっても無差別に爆撃された、あるいはされるであろうすべての町や人々を象徴していると言えるでしょう。この観点から論理的に推測すれば、もしこの絵画の依頼が反乱軍側からなされていたとしたら、作品のタイトルは「コルドバ」「バリャドリッド」「カブラ」など、共和国軍の空軍によって爆撃された町の名前になっていた可能性もあるのです。

痛みと涙。先ほど見たように、ピカソは絵画の中で、強力な焼夷弾の爆発と思われる場面、ランプと電球によって象徴される——がどの町で起きたのかについて、何の手がかりも与えていません。同様に、馬または雌馬が反乱軍の象徴であり、中央の闘牛が共和国軍の具現であると結論づけるような明確な証拠も、絵の中には存在しません。ただし、馬や闘牛の一部を覆う寓意的なコラージュ楔形文字を思わせるような模様が、二つの「テキスト」、すなわち二つのイデオロギー、宗教、人生観、社会のあり方などが、互いに敵対し、死闘を繰り広げていることを示唆しています。そして、勝利を収めるのは明らかに「闘牛=イデオロギー」です。

しかしながら、それは祝福されるべき勝利ではありません。絵画の文脈——スペイン内戦に立ち返れば、これは最も悲惨な戦争、すなわち兄弟同士が殺し合う「内戦」なのです。だからこそ、共和国を象徴する女性——死闘を照らすランプを掲げる姿——は、目の前で繰り広げられる出来事に深い悲しみを覚え、胸に手を当てて苦悩と悲嘆を表しています。そして、ミノタウロス——それはピカソ自身がこの悲劇を見つめている姿かもしれません——もまた、暗がりの中で涙を流しているのです。

一筋の希望。絵画の中で希望を象徴する唯一の要素は、平和の象徴である「花」と「鳩」です。花は、折れた剣のそばに咲いています——これは武器の破壊、すなわち花が芽吹くための絶対条件を象徴しているのでしょうか？そして鳩は、苦しげに鳴いているものの、まだ命を保っています。1941年、第二次世界大戦が勃発するわずか2年前、ピカソは《鳩のある静物》という作品の中で、翼を十字に広げた鳩をテーブルの上に犠牲として描いています（長崎県美術館所蔵）。この鳩は、『ゲルニカ』に登場する、テーブルの上でうめく鳩と同じ存在なのではないでしょうか？テーブルの位置や鳩の配置から見ても、『ゲルニカ』と《鳩のある静物》には同じ構図が用いられているように思われます。

GUERNICA, un tríptico sui generis. Propaganda, deseo, dolor, llanto y un débil rayo de esperanza. Francisco Torregrosa

GUERNICA“ es un cuadro repleto de símbolos, por lo que se presta a un amplio abanico de lecturas, seguramente, tantas como observadores del lienzo. Este es, sin duda, uno de sus mayores atractivos. Ahora bien, lo que considero que convierte a esta obra maestra en inmortal es el tema - universal e intemporal- que trata en la pirámide central, a saber, la lucha, el conflicto, la disputa, que ha regido, rige y regirá el comportamiento -el proceder- de todas las formas de vida existentes en nuestro planeta. Para ello, Picasso recurre a la simbología de la fiesta de los toros -en concreto, la suerte de varas (toro y caballo como adversarios, enemigos irreconciliables).

Propaganda y deseo. “GUERNICA” es una obra de encargo en el contexto de la Guerra Civil Española (1936-1939). En principio, un mural -que acabó siendo un cuadro- encargado por el Gobierno de la República Española para ser expuesto como obra artística principal en el Pabellón de España de la Exposición Universal de París de 1937. Así pues, en buena lógica, su narrativa propagandística debe de transcurrir a través de dos líneas maestras: la primera, transmitir con fuerza y sin ningún tipo de dudas la victoria del ejército republicano sobre el ejército rebelde (dirigido por el generalísimo Franco) y, la segunda, denunciar las atrocidades -hoy diríamos los crímenes de guerra- del ejército franquista.

En la primera mitad de 1937, el resultado de la guerra civil es incierto. Picasso, evocando, en particular, las viñetas 1 y 14 de "Sueño y mentira de Franco" -realizadas en enero de ese mismo año- nos narra en la pirámide central la victoria del ejército republicano (simbolizado por un toro) sobre el ejército sublevado (simbolizado por un caballo o una yegua). De esta interpretación se deduce que el personaje muerto que forma la base de la pirámide es el generalísimo Franco, quien ha sido desmontado de su caballo-ejército y ha encontrado la muerte tras la furibunda embestida del toro-ejército republicano.

Estamos ante un deseo del pintor que mata así dos pájaros de un tiro: anuncia la próxima victoria de la República, al tiempo que hace realidad su anhelo de venganza sobre el generalísimo Franco cuya aviación, siendo Picasso director del Museo Nacional del Prado, había bombardeado con bombas incendiarias la pinacoteca nacional de España.

Elementos propagandísticos se aprecian, también, a ambos lados de la pirámide. El título "GUERNICA" nos traslada directamente al bombardeo indiscriminado que sufrió esta ciudad por parte de la aviación alemana e italiana -aliada de las tropas sublevadas- el 26 de abril de 1937. Estamos pues ante un enemigo inhumano, monstruoso, que no respeta la vida de niños, mujeres. Para esta bestia aberrante, el fin justifica los medios. Ahora bien, no debemos olvidar que bombardeos indiscriminados de la población civil fueron realizados por ambos bandos. ¿Es esta la razón por la que Picasso no refleja en el lienzo ningún punto de referencia -elemento paisajístico, edificio, estructura, objeto, indicación expresa ...- que conecte directamente el cuadro con el escenario de la población de Guernica? Si el pintor tenía esto en mente al realizar su obra, entonces, "GUERNICA" es un símbolo más -¿es esta la razón por la que Picasso escribe "GUERNICA"

con mayúsculas en los documentos jurídicos que firma de su puño y letra?-. Si esto es así, "GUERNICA", el cuadro, representa todas las poblaciones que han sufrido, sufren o sufrirán bombardeos -aéreos o no- indiscriminados por parte de cualquier ejército. En esta línea, podemos inferir en buena lógica que si el encargo del cuadro hubiera sido por parte del bando rebelde, el título del mismo muy bien podría haber sido "CÓRDOBA", "VALLADOLID", "CABRA" ... poblaciones bombardeadas por la aviación republicana.

Dolor y llanto. Al igual que, como acabamos de ver, Picasso no nos da ninguna pista en el lienzo acerca de la localidad sobre la que estalla lo que parece ser una potente bomba incendiaria - simbolizada por la lámpara y la bombilla-, tampoco hay ningún indicio en el cuadro que nos permita concluir que el caballo o yegua sea un símbolo del bando sublevado y el toro bravo central sea la encarnación del ejército republicano. Tan sólo, el collage alegórico que cubre algunas partes del caballo o yegua y del toro -y que parece evocar la escritura cuneiforme- sugiere que estamos ante dos textos -es decir, dos ideologías, religiones, formas de entender la vida o de organizar la sociedad ... hostiles, enfrentadas a muerte-. La victoria es, claramente, del toro-ideología. Ahora bien, es esta una victoria triste, que no debe ser festejada. Retomando el contexto del cuadro -la Guerra Civil Española-, estamos aquí ante la peor de todas las guerras posibles: una guerra fratricida. Es por ello que, la República -representada por la mujer que sostiene el quinqué alumbrando la escena donde los hermanos luchan a muerte- expresa dolor por los acontecimientos que presencia y se lleva la mano al pecho, al corazón, en señal de amargura, aflicción. Asimismo, el minotauro -¿el propio Picasso observando el drama desatado? - llora en la penumbra. Un débil rayo de esperanza. Los únicos símbolos que invitan a la esperanza en el lienzo.

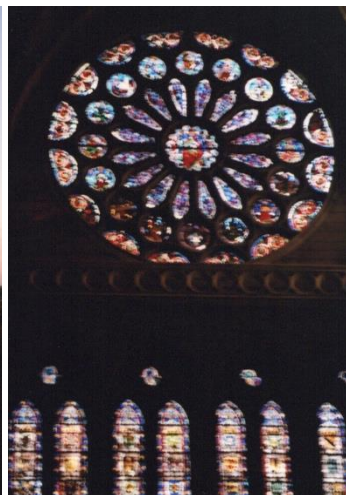


5 El Camino y yo カミーノと私 Yukari Sakamoto 坂本 由香里

「世界スペイン友の会」の皆様ならご存じかと思いますが、スペインには「巡礼路」があります。巡礼路はいくつもあり、それぞれ名称があります。世界中から巡礼者がやって来る「フランス人の道」。美しい海岸線とアップダウンの険しい道が続く「北の道」。知名度の低く巡礼者が少ない「マドリッドの道」。多彩なルートがまるで蜘蛛の糸のようにスペイン全土に広がっています。私たちはこれまで、「フランス人の道」、「北の道」を完歩して、現在「マドリッドの道」を歩いています。総距離は2000kmを超えました。

巡礼路を歩き始める前、私は毎年スペイン一人旅をしていたのですが、巡礼というものに興味を持っていませんでした。そんな私を巡礼路に導いたのは、「フランス人の道」を一人で往復した女性の体験記『気づきの旅』という本です。気持ちが傾き始めた後、さらなるきっかけが重なりました。まず、相方の早期退職と長崎移住、そして、私が数年来の目標にしていた、ピレネー山脈スペイン側最高峰アネト山に登頂を果たしたことです。このふたつのきっかけが私を大きく動かしてくれました。

巡礼路では毎日外国の方々と顔見知りになります。残念なことに、スペイン語での会話は、巡礼宿の世話人オスピタレロ、バルやレストランの店員さんたちに限られ、巡礼者たちとのコミュニケーションは英語が主です。私は英語はまったくできないのですが、挨拶、“¡Buen Camino!”「良い巡礼を！」だけのやり取りで問題ありません。



巡礼路には、私が愛するスペインの大地をただひたすら歩き続け、スペインを最大限に味わうことができる濃密な時間があります。それを味わい尽くすことこそが私の大きな喜びでした。だからかも知れませんが、最初に歩いた「フランス人の道」で終着地サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の偉容を目の当たりにした時、私の中には深い感動ではなく、あまりにあっけないというか、あっさりとした感慨があるだけでした。

いま考えてみると、聖地に辿り着くことができたからといって、自分が精神的に成長したわけでも、心が清浄になったわけでもないのだと思います。というか、実はその真逆で、一層穢れ、心身ともに疲労困憊の自分がいるだけかもしれない。

それでも、なぜか毎年歩きたくなる。それは、ひょっとしたら「次回こそは、成長し清浄な心を手に入れ、文句なし大満足の巡礼を成し遂げたい」という願望が心の奥でいつも燻っているからかもしれません。

2014年にスタートしてから12年が経ちましたが、もちろんそんな願望はいまだに成就していません。いや、私は、おそらく一生この巡礼路を歩き続けなくてはならないのだろうと思っています。



1) はじめに

2025年3月まで友の会代表を務めていた橋本です。この4月に横浜へ転勤となったため、代表は他の方に代わっていただいたのですが、友の会には今後も協力して参ります。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

さて、昨年のBoletín に掲載した Mallorca 訪問記で「この妄想、何と2024年7月に成就し、ValenciaとBarcelonaへの訪問が叶った」と書いたのをご記憶の方もおられると思います。今回はその続きであります。

2) スペインへの道が再び開かれた

私は某機関に所属する研究者なのですが、要はサラリーマンですので、スペインで何らかの研究集会が企画されていると渡西しやすくなります。2023年6月にMallorcaを訪問できたのも国際学会があったためで、有難いことに出張で行かせてもらいました。

そのMallorca出張から帰国した1か月後、偶々「ガウディとサグラダ・ファミリア展」を東京で見る機会に恵まれました。素晴らしい展示に感動する一方、「Barcelonaで学会なんて予定されてないし、Sagrada Familiaに行ける日は来るのだろうか？」がその時の正直な感想でした。

4か月後、2023年11月にUniversidad Católica de Valencia (略称 UCV) のJ. R. García March さん (通称 J-Rafa) らが主催するハボウキガイのオンライン研究集会があり、お誘いの掛かった私はそこで1題発表させていただきました。この集会の最後でJ-Rafaが「来年7月にValenciaで対面式の研究集会を開くからみんな来てね」と言いだしてビックリ。「やったー、これでまたスペインへ行ける！」というわけです。

うちの職場では、2年連続で海外出張を勝ち取るのはそんなに簡単ではありません。そこで2024年のスペイン行きは早々に出張を諦め自費で行くことに。出張だと学会終了後速やかに出国する必要がありますが、自費参加の場合は学会の前後に観光も可能となります。ラッキーな事に、7月上旬という観光シーズンにも関わらず往復14万円/人という安いチケットも見つかりました。そこで高1の娘も同伴し、Barcelona - Valencia 間は鉄道利用、学会の前後にBarcelona観光をする日程を立てました。

3) 憧れのSagrada Familiaへ

7月7日 (日) 午後のAir China便で福岡空港から出国。大連、北京と乗り継ぎ、現地時間8日 (月) 午前10時ごろ、無事Aeropuerto de Barcelona-El Pratに到着しました。空港からはバスでスペイン広場へ、更に地下鉄でSagrada Familia駅へ移動です。駅から地上へ出て、後ろを振り返ると、そこにBasilica de la Sagrada Familiaが建っていました (写真1)。高さ172m。まだ建設中ですが、実に壮観です。東京でガウディ展を見たあの日、まさか1年後に自分がここに来るとは想像もしていなかつただけに、何とも不思議な感覚でした。

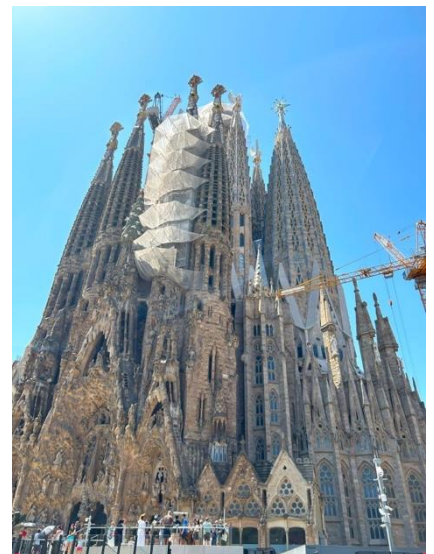


写真1：サグラダ・ファミリア

その後、ホテルで少し休憩、昼食の後、午後2時半ごろ再びBasilicaへ。事前に購入していたチケットで生誕のファサードから入場します。最初に目にしたのは入り口にある緑色の扉。あの外尾悦郎さんがデザインしたカブトムシ、カエル、イモムシ、カタツムリ等、様々な生き物が彫られています。見ていて楽しくなります。

聖堂に入ると、西側のステンドグラスから差し込んだ光で内部は美しくオレンジ色に染まっていました。テレビで何度も見た光景ですが、やはり実際そこに立つてみると感動ひとしおです。その次は聖堂の上部へ。今回は午後ということで、2つあるエレベーターのうち受難のファサード側を選びました。天気は快晴、遠く地中海やモンジュイックの丘がはっきり見えます(写真2)。感心したのは、Basilicaから海岸まで3kmほどの間に高い建物がまったく無いこと。恐らく建築規制があるのでしょう。これによってBasilicaが街のシンボルとして浮かび上がるとともに、素晴らしい街並み、眺望も維持されるわけです。日本の都市計画にもこれくらいのビジョンがあったらなあ、と改めて感じました。

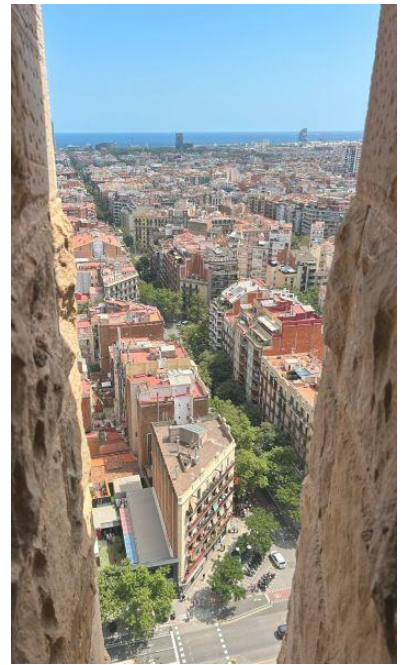


写真2：鐘塔からの眺め

4) Valencia へ移動

翌7月9日(火)、Barcelona-Sants駅から特急列車EuroMedに乗り、地中海沿いを移動、3時間でValenciaに到着しました。宿泊先の民泊に荷物を置き、まず向かったのはCatedral de Valencia サンタマリア大聖堂。「地方都市だし、大したことないだろう」との想像は良い意味で外れ、数えきれないほどの宗教画や、主祭壇天井の見事な装飾に圧倒されました。スペインが持つ文化の厚みはやはりすごいものです。

この大聖堂の脇には Torre de Miguelete ミゲレテの塔があり(写真3)、Valenciaの街を一望できます。そこから徒歩数分の La Lonja (かつての絹取引所)も素晴らしい建物でした。スペイン観光でよく挙げられるのは Barcelona、Madrid、Andalucia 等で、Valencia はさほど有名ではないですが、見どころは沢山ありお勧めできます。

なおミゲレテの塔は、私が敬愛する千々石ミゲル(1569-1633)と名前が似ているものの、彼はValenciaを訪問しておらず、何の関係もありません。



写真3：左の高い建物がミゲレテの塔。その右に大聖堂が繋がっている。

5) 学会に参加

7月10日（水）からいよいよ学会がスタート。今回、スペインの海洋関連6大学が主催する国際学会 9th International Symposium on Marine Sciences (ISMS 2024) が企画され、そのサブイベントとしてUCV主催のLife Pinnarca^{※1}、つまりハボウキガイ研究者のための集会在Valenciaで開催されました。参加者はスペイン、イタリア、クロアチアなど地中海沿岸国を中心に40名程度。1年前のMallorcaで、想定外のフライトキャンセルのためお会いできなかった二人の研究者、J-RafaとJosé Tenaさん（二人ともUCVの教授）にここでようやく会うことが出来ました。

Life Pinnarcaの研究発表はこの日の午後で、そのラストバッターが私となりました（写真4）。内容は、タイラギ^{※2}の稚貝生産技術を地中海ハボウキガイ *Pinna nobilis* ^{※3}にどのように適用できるか、です。英語での口頭発表は毎回緊張するのですが、今回は緊張感よりワクワク感でいっぱい、早く順番回ってこい、と思うほどでした。こういう経験は過去にあまり無く、これも非常に不思議な感覚でした。千々石ミゲルが憑いていたのかもしれませんが。聴衆の反応は上々で、その後に開かれた立食パーティで色々と質問も頂いたので、良い発表が出来たのだと思います。



写真4：学会発表中の筆者。スペイン語ではなく英語で喋っています。

11日（木）はLife Pinnarca参加者全員で観光バスに乗り、2時間掛けてCalpeという海沿いの街へ移動です。ここにはUCVの臨海実験所があり、絶滅危惧種である *Pinna nobilis* が飼育されています。昨年私がMallorcaで拝めたのは *Pinna nobilis* の死殻だけでしたが、ここで初めてホンモノの生きた個体に感動のご対面。施設見学後は *Pinna nobilis* の保全戦略を議論する座談会あり、美味しいパエリアを頂く昼食会あり、と楽しませてもらいました。

6) 再びBarcelonaへ

12日（金）は学会最終日、13日（土）は再びBarcelonaへ移動、14日（日）は丸一日Barcelona観光としました。行先はMontserratの大聖堂。天正遣欧使節がローマから日本へ戻る際、1585年8月にここに立ち寄った、との記録があるためです。

14日の朝7時に市内のホテルを出発、スペイン広場駅からカタルーニャ鉄道に乗りMonistrol de Montserrat駅へ。更にアプト式の登山鉄道に乗り換え、急こう配を20分ほど登るとMontserrat駅に到着。Barcelona市内から約1時間半、標高は725m、岩山の中腹に立派な大聖堂が建っています（写真5）。今からちょうど千年前の1025年に、こんな人里離れた山の上にこれだけの聖堂をよく建てたものだと感心します。



写真5：Montserratの大聖堂

この大聖堂の目玉は黒いマリア像。彼女の右手にある玉に触れると願い事が叶う、との言い伝えがあります。私は、またスペインを訪問できますように、*Pinna nobilis* の保全に貢献できますように、と念じつつ玉に触れました。娘も何か願い事をしたようです(写真6)。それぞれ、いつかきっと叶う日が来るでしょう。

7) 最後に

今回の旅行では地中海で *Pinna nobilis* を研究する方々に直接会えたほか、千々石ミゲルの足跡に触れることも出来ました。また、各国の研究者が集まる国際学会がどんなものであるか、娘に見せられたのも大きな意味があったと思います。文系で、生物には特に関心の無い娘ですが、学会期間中、研究者の方々が気さくに娘に話しかけてくれて、娘は懸命に英語で答えていました。これも本人にとって良い経験になったことでしょう。

前回書いたように、Mallorca出張を終えた際は「きっとスペインを再訪できる、それも、今の私には思いもつかない展開で」との予感がありました。しかし今回の旅行を終えた際は、特にピンと来るものはありませんでした。ミゲルから次のお導きがあるまで、期待しつつ待ちたいと思います。皆様も乞うご期待ください。



写真6：黒いマリアに触れる我が娘。

※1：<https://ismsvalencia.es/life-pinnarca/>

※2：日本沿岸に住む二枚貝で、ハボウキガイ科の一種です。

※3：この貝もハボウキガイ科の一種。全ての生物にはラテン語の学名があり、斜体字で書く決まりがあります。

<長崎スペイン世界友の会>

入会金：2,000円、年会費：1,000円。関心のある方は、下記にご連絡ください。

連絡先（事務局所在地）：

〒852-1855 長崎市中園町17番14号「カサ・イベリア」内

メール：<mailto:info@amigos-mundo-hispanico.jp>

URL：www.amigos-mundo-hispanico.jp